

時計の針戻し確認審査20mまでに

耐震偽装

団塊の世代がもうすぐ定年を迎える。この人達の子供が大学に入ってきたころ、大学の入学定員は相当増やされた。今は元の定員に戻している。多くを抱えられるならそのままにしたら良いのではないかと考えがちだ。しかし、同世代の人口に対して大学で学べるレベルの人間はある割合



東京工業大学統合研究院教授

和田 章

合しかいない。だから定員を一部であったし、31層を超えるの評価委員会を経て、建設が多いままにしておく卒業生、建物の数もそれほど多くなっていた。正しい判断だったレベルが下がってしまつた。つまり、できる人がと思う。

言う。建築分野に進んでくる人達のレベルはどうなのか。

その後、2000年の建築

建築基準法ができたころ、1968年十勝沖地震、1978年宮城県沖地震など多くの被害の経験をもとに、設計法が改良され、一般の建築の普及、大臣指定電算ソフトを併せて300人程だった。構造設計にも面倒な計算がなくなり、高さがあつたし数は少なくなつた。優れた人たちがしていた仕事といえる。東京オリンピックのころ、河野一郎の一声で31層の制限がはずされ、コンピュータの数値解析技術に支えられ超高層建築が建てられるようになった。このころは、コンピュータは非常に高価で使えるエンジニアは、日本建築総合試験所など

ピアレビュー方式必要に

るのは高さ20層程度までに戻すべきだ。高さ20層から60層の建物は構造設計の専門家の集まるピアレビュー委員会に審査する。60層以上の超高層建築物は今のようにならざるを得ない。構造設計士は解決できる。構造設計士を社会に認めてもらい、構造設計者を明示する。個人が責任を果たして仕事ができるように保険制度を充実させるなど、もちろん必要な対策である。保有水平耐力法、限界耐力計算法、エネルギー法などの審査はピアレビュー方式でなければ無理である。

安心

編集企画

FORUM

月曜日

安全・安心

第13 火曜日

A&E

木曜日

ザ・げんば

第135 金曜日

環境創造